

「青年海外協力隊」

# 大江 里佳

OE Satoka

喜びと不安を抱え  
思い出の地、ルワンダへ

世界では、約11億人が安全な水の供給を受けられないと言われている。特にアフリカでは水道の整備が遅れており、汚染された川の水を飲料水として使っていたり、子どもたちが集落から離れた水源まで水くみに通ったりしている。こうした状況を受けて立ち上がったのが「水の防衛隊」だ。水資源の確保や給水施設の整備、衛生啓発などの分野を中心に、JICAボランティアや専門家をアフリカ諸国に派遣し、それぞれの地域が抱える問題の解決に向けて取り組んでいる。

## JICA Volunteer Story

PROFILE

愛知県出身。大学では教養学部国際学科に所属。卒業後は、民間企業に2年間勤めた後、2014年7月から青年海外協力隊(コミュニティ開発)としてルワンダで活動中。

### 「地域の水を維持・管理できる仕組みを」

水に関するさまざまな問題を抱えているアフリカ中部のルワンダ。この国に「水の防衛隊」として派遣されたのが、大江里佳さんだ。大江さんにとって専門外の分野での挑戦だが、そのひた向きの姿勢が人々の意識を変えている。



青年海外協力隊の大江里佳さんは、水の防衛隊の一員として、ルワンダ東部のカヨンザ郡で活動している。任務の一つが、水衛生に関する住民への啓発活動だ。「丘陵地では多くの地域に水道管は通っていないもの、たびたび断水が発生します。また、貧しい家庭では給水にかかる料金を惜しみ、自然の湧水やため池の水を利用していている」という話を聞きますが、水質は決して安全とは言えません」と大江さんは説明する。

大学でアフリカの歴史などについて学んだ大江さん。3年生のときにゼミのプロジェクトの一環でルワンダを訪れた経験が、協力隊に関心を持つきっかけとなった。「世界には多様な環境や文化、価値観が存在することに気付かされました。そのときの思いが頭から離れず、次は長期間アフリカに滞在し、現地の人々と一緒に活動したいと思ったのです」。卒業後に就職した民間企業から、思い切って国際協力の道へと転じた大江さん。再びルワンダの土を踏むことになったが、喜びと同時に不安を抱えていた。水衛生に関する専門知識をほとんど持っていなかったのだ。

「何から手を付ければいいのか戸惑いましたが、ルワンダではさまざまなコミュニティの中で、衛生クラブが結成されていたので、その取り組みを参考にすることにしました」と大江さん。地域の学校を回って手洗い指導を行ったり、村の住民を対象としたワークショップを開いたり、身近なところから活動をスタートさせた。また、ルワンダに派遣されている水の防衛隊員の間では、定期的な情報交換の場が設けられているため、他の隊員の取り組みも活動を計画する上で参考になったという。

### 地域の大切な井戸 管理者に芽生えた責任感

大江さんが取り組んでいるもう一つの活動が、これまで日本の支援で建設された井戸を維持・管理する人材を



a. 学校の子どもたちに手洗いを指導する大江さん  
b. 壊れた井戸を修理する水委員会のメンバー  
c. ワークショップの終了後には、参加者それぞれが、学んだことと今後実施することを発表した  
d. 水委員会のメンバーと。井戸を乱暴に扱う子どもがいたら注意するなど、管理者としての意識が高まっている

育成すること。井戸を管理する水委員会は存在していたが、当初のメンバーから人が変わったことで、管理者があやふやな状態になっていたのだ。そこで、大江さんは組織の再建を行い、メンバーの当事者意識を向上させようと考えた。まずは最適な運営方法を探るため、井戸がある村に何度も足を運び、今のメンバーや住民から聞き取り調査を行った。そして、村が抱える問題を明らかにした上で、委員会の再選挙を実現させた。

こうして土台は整ったが、ここからが正念場だった。大江さんは、各自の役割を明確にするために委員会の運営マニュアルを作成したほか、井戸の定期的なメンテナンスを行う際のチェック表も準備した。さらに、複数の村の委員会を集めたワークショップも開催し、井戸の仕組みや修理方法について説明した。「メンバーとのコミュニケーションを大切にしているので、現地語の習得にも励んでいます」と大江さんは話す。

赴任から1年が過ぎたころ、メンバーがある程度の知識を身に付け、基本的な運営ができるようになったため、大江さんは何か問題が発生したら同行するという協力で切り替えた。そんなある日、委員会のメンバーから大江さんのもとに連絡が入った。「最初は、いつものように井戸の水が出なくなり、その修理をするという連絡だと思いましたが」と大江さん。ところが、その日は違ったのだ。「驚いたことに、毎週行っている点検で井戸にいつもと違う状況が見られ、水も少なくなっていることが分かったという連絡でした。そして、水が完全に出なくなる前に対処しようと彼らから提案を受けたのです。問題が起きる前に自分たちで対処する、まさに私が目指してきたことだったので本当にうれしく、これで私が去った後も大丈夫だと安心しました」。

大切な水を自分たちの手で守る。水委員会のメンバーたちに芽生えつつある意識を、さらに個々の住民へと広げていくことが、大江さんの今後の課題だという。人々の生活改善のために、アフリカ各地で奮闘を続ける水の防衛隊が果たす役割は大きい。



井戸を管理する水委員会を対象にしたワークショップ。大江さんは、井戸のパーツを見せながら仕組みを説明した